翻訳の未来を考える

JTF JOURNAL

#271
May / June 2014
JAPAN TRANSLATION FEDERATION

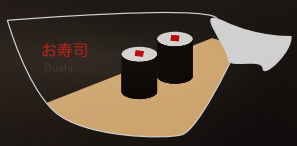
Writer's Tweet

一般社団法人 日本翻訳連盟 機関誌 日本翻訳ジャーナル

翻訳業界調査結果報告

JTFスタイルガイドとCCライセンスの素敵な関係

論文紹介：高取由紀「インタビューの翻訳」



ビジネス急拡大につき
優秀な人材を多数募集中！

・プロジェクトマネージャー
・翻訳マネージャー /
　翻訳コーディネーター / 翻訳者
・ローカリゼーションエンジニア
・QA テスティングエンジニア
・プリセールス
・アカウントマネージャー

詳細は下記 URL をご覧ください。
http://www.sdl.com/jp/about-us/careers/default.asp

SDL Your Content Their Language

サン・フレア アカデミー 未来に翻訳者が集う場所

「英語が好き」を仕事にしたい
わたしの夢を、ここでかなえる

通学科／通信科講座、ワンデーセミナーなど多彩なプログラムをご用意。
「翻訳実務検定TQE」を運営し、翻訳者の育成に力を入れています。

☎03-6675-3965
【受付時間 平日10:00～20:00 土曜日10:00～17:00】

詳しくはウェブサイトで

サン・フレア アカデミー　検索

SUNFLARE Academy サン・フレア アカデミー
〒160-0004 東京都新宿区四谷4-7 新宿ヒロセビル2階　E-mail：academy@sunflare.co.jp

翻訳の未来を考える

JTF JOURNAL

May / June 2014 #271

contents

翻訳業界調査

4 「第4回翻訳業界調査結果」のご報告

JTFスタイルガイド

6 JTFスタイルガイドとCCライセンスの素敵な関係

イベント報告

8 第7回JTF翻訳セミナー
「メディカル翻訳：クライアントの要求にどうこたえるか」● 川原早霧氏

10 第8回JTF翻訳セミナー
「即戦力がつくグローバル・ライティング」● 日向清人氏

海外論文紹介

12 インタビューの翻訳：終助詞の使い方で変わる話者のイメージ操作

連載コラム

16 機械翻訳との対峙 ● 石川守哉

18 不明瞭な会社の将来像と明瞭な自身の将来像 ● 中村泰洋

20 在米翻訳者のつぶやき ● ラッセル秀子

22 インハウス経験がくれたもの ● 石亀 豪

24 翻訳がつくる日本語 ● 中村桃子

表紙のことば

「翻訳メガネ」

2014年4月10 - 11日の両日にオラクル青山センターにて開催されたTAUS Tokyo Executive Forumにおいて、NTTドコモが発表した「Translation Glass」（翻訳メガネ）が、最も革新的なプレゼンテーションに対して贈られるTAUS Excellence Awardを受賞した。この賞は、発表を聴いた参加者の投票によって受賞者が決定される。
ユーザーが「翻訳メガネ」を掛けてレストランのメニューを読むと、メニューが選択した言語に自動的に翻訳されてグラス上に表示される。この技術は昨年アジア最大規模のITエレクトロニクス展示会であるCEATEC JAPAN2013で発表されて大きな反響を呼んだもので、文字認識技術と自然言語処理技術を複合することでその機能を実現している。TAUSの主催者からも、遠くない将来にあらゆる場面で翻訳サービスが埋め込まれて提供されるというTAUSのビジョンに通じる意欲的な技術革新である点が高く評価された。
表紙の写真は「翻訳メガネ」開発チームのリーダーで、TAUSにおける発表者でもある三井力（みついちから）氏（NTTドコモ研究開発センター）。
表紙のイラストはNTTドコモのプレゼンテーション資料から許可を得て転載しました。

一般社団法人 日本翻訳連盟 機関誌
日本翻訳ジャーナル
2014年5月／6月号 #271
発行人●東 郁男（会長）
編集人●河野 弘毅

一般社団法人 日本翻訳連盟
〒104-0031
東京都中央区京橋3-9-2 宝国ビル7F
TEL. 03-6228-6607　FAX. 03-6228-6604
E-mail. info@jtf.jp　URL. http://www.jtf.jp/

無断転用禁止 Copyright©2014 Japan Translation Federation

「第４回翻訳業界調査結果」のご報告

JTF 理事・翻訳業界調査委員長
川村 みどり

翻訳業界は、我が国の経済・産業、科学技術、文化などのあらゆる分野にとって、不可欠の産業として定着してきました。日本翻訳連盟は、翻訳産業の実態を解明し、翻訳業界の存在意義を内外に示し、翻訳業界の地位向上を図ることを目的として、翻訳業界の実態調査を行っています。

当連盟は2013年9月下旬から12月初旬にかけて、5年ぶり4回目の2013年度翻訳業界実態調査アンケートを実施しました。2004年より業界の現状を数量的に把握するためにこの業界調査を実施しています。今回の調査は、従来どおり法人の調査を行うと同時に、当連盟としては初の個人翻訳者の実態調査も実施しました。以下、その結果を要約します。

■ 回答率

今回の調査対象企業数は771社、有効回収率は25%、個人翻訳者の有効回収数は429人です。法人に関しては、前回の調査の回収率を上回りますが、JTF 法人会員のアンケート回収率は54%、JTF 個人会員の回収率は33% で、JTF 会員の回収率を上げることが今後の課題の一つとして認識しています。

■ 調査項目

(1)　翻訳企業調査
翻訳企業の概要、景況感、受注単価、従業員と登録翻訳者、取扱分野と取扱言語、翻訳支援ツール
(2)　個人翻訳者調査
個人翻訳者のプロフィール、収入、景況感、仕事の形態、取扱分野と取扱言語、翻訳料金、翻訳作業の状況

翻訳企業調査

総売上高

2012年度の総売上高で「1億～3億円未満」が最も多く28.4%、ついで「1000万～3000万円未満」が16.3%、「5000万～1億円未満」が12.6%、「20億円以上」が10.5% の順になっています。20年度調査と比べると、「1億～3億円未満」と「1000万～3000万円未満」が増え、「3億～5億円未満」が減っています。

景況感

2012年度の翻訳売上高は、2011年度に比べると約4割の企業が5%以上増えたとなっており、翻訳売上高が増えた企業が減った企業を上まわっています。

過去1年間での翻訳の受注単価の変動をたずねると、「5% 以上上がった」が4.2%、「どちらともいえない」が69.5%、「5% 以上下がった」が26.3% で、およそ7割の企業は大きな変動なしと答えていますが、4分の1の企業は「下がった」と答え、受注単価は横ばいから一部は下落傾向とみられます。

1年後の翻訳受注額の見通しをたずねると、「5% 以上増えると思う」が49.5%、「変わらないと思う」が31.1%、「5% 以上減ると思う」が19.5% で、受注増を予想する企業が半分近くなっています。

受注単価

英日翻訳・日英翻訳とも、料金計算基準は原文基準が60% 以上となっています。

英日翻訳の料金計算基準を「原文基準 (英語のワード数)」と答えた企業に、原文 (英語)1ワードに換算した平均的な価格帯をたずねると、「19円未満」までが40.9%、「23円未満」までに80% が含まれ、「23円以上」が20% となっています。20年度調査と比べると、「19円未満」は21.6% →40.9% と増加し、「23円以上」が47.4% →20% と減少しています。

従業員と登録翻訳者

翻訳事業専従の従業員について業務別の人数内訳 (兼務の場合は按分) をたずねると、「翻訳者・チェッカー」が36.6%、「コーディネーター／PM」が35.1% で、2つの業務をあわせて71.7%、「営業」12.9%、「管理部門 (経理・総務・人事)」8.7%、「その他スタッフ」が6.7% という比率になっています。

翻訳企業が翻訳者に求めるものは、最も重要なものとして「語学力と表現力」、ついで「正確さ」、「専門知識」の順となっています。

取扱分野と取扱言語

主要な取扱分野は、「科学・工業技術文書」、「ビジネス文書 (契約書・金融・経済含む)」、「コンピュータ (ソフトウェア・ハードウェア・ローカリゼーション)」が3大分野で、取扱言語は、英語が71.1%、ついで中国語が11% です。

個人翻訳者調査

収入

2012年度の総収入は、「300万円未満」が34.2%、「400万円未満」が50.4%、「500万円未満」が64.6%、「600万円未満」に76.5%が含まれ、「600万円以上」が23.4%となっています。300万円台から400万円台が中位クラスとなります。

景況感

2012年度の翻訳収入は、対前年度で「5%以上増えた」翻訳者が36.5%、大きな変動なしが40.9%、「5%以上減った」22.6%で、翻訳収入の増えた翻訳者が減った翻訳者を上まわっています。

仕事の形態（受注方法・翻訳会社数）

受注方法は、「翻訳会社から受注」が86.7%、「ソースクライアントから直接受注」が38.2%、「派遣 / アルバイト / 社員として翻訳に従事」が10%となっています。

コンスタントに受注している翻訳会社数は、「1社」41.2%、「2社」25.4%、「3社」19.7%で、3社以下が86.3%を占めます。ソースクライアントとの直接取引の割合は、直接取引なしが50.7%、「1～20%未満」が25.1%、「80%以上」が直接取引という翻訳者が9.8%です。

取扱分野

主要な取扱分野は、「医薬・バイオ」、「ビジネス文書（契約書・金融・経済含む）」、「コンピュータ（ソフトウェア・ハードウェア・ローカリゼーション）」「科学・工業技術文書」、「特許」の順で、取扱言語は、英語が93%、ついで中国語が2.2%です。

この報告書が、法人の皆さまの企業経営に役立ち、個人翻訳者の皆さまの業務の参考となれば幸いです。また、このアンケートを通じて、翻訳業界全体に関心をもち、業界の地位向上のためにご協力いただければ幸いに存じます。日本翻訳連盟は、今後とも業界発展のために尽力する所存ですので、一層のご協力をお願い申し上げます。

今回の掲載内容は、2014年3月に発行した『2013年度翻訳白書 －第4回翻訳業界調査報告書－』の一部です。印刷した『2013年度翻訳白書』は、JTF会員には無料配布され、非会員の希望者の方には有料でご提供いたします。ご希望の方はお早目に事務局までお問い合わせください。

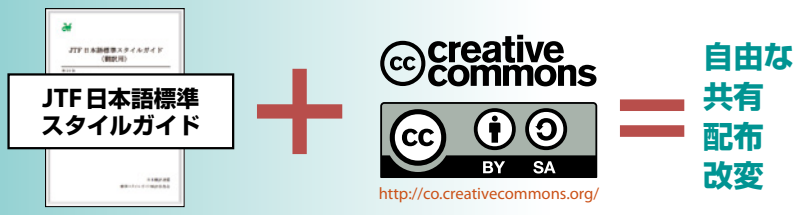
JTFスタイルガイドとCCライセンスの素敵な関係

標準スタイルガイド検討委員会
委員長 **田中千鶴香**

Hatsune Miku
Crypton Future Media inc.
CC BY-NC

2014年2月、JTF 標準スタイルガイド検討委員会は『JTF 日本語標準スタイルガイド』（以下 JTF スタイルガイド）にクリエイティブ・コモンズ・ライセンス（CC ライセンス）を設定しました。これにより同ライセンスの条件に従う限り、利用者は、JTF スタイルガイドを自由に共有、配布、改変できるようになりました。

本記事では、著作権に対する考え方として比較的新しいアプローチであるCC ライセンスがどのようなものであるかを解説します。また、CC ライセンスが設定された JTF スタイルガイドの利用方法を具体的に説明します。



Creative Commonsとは

クリエイティブ･コモンズとは、クリエイティブ･コモンズ・ライセンス（CC ライセンス）を提唱する国際的非営利組織とそのプロジェクトの総称です。インターネット時代にふさわしい著作権のあり方を考え、提案することを活動の目的としています。

クリエイティブ・コモンズが提唱する CC ライセンスは、著作物を共有するための有効な手段として世界中で広く活用されています。日本でも採用の動きが徐々に広まっており、実はあの初音ミクにもCC ライセンスが設定されています。

クリエイティブ・コモンズの活動はどのように始まったのでしょうか。また、従来の著作権法に基づく考え方とどう違うのでしょうか。

commonsはもともと「共有地、共有財産」

クリエイティブ・コモンズは 2001 年、当時スタンフォード大学教授のローレンス・レッシグ氏を中心とする専門家のグループによって立ち上げられました。クリエイティブ・コモンズは米国発の構想ですが、commons の起源は産業革命以前の英国に遡ります。

かつての英国には牧草地の共有管理を提唱する活動があり、その際に共有地とされた牧草地がcommons（共有地）と呼ばれました。これに似た制度は日本の「入会（いりあい）」など、世界各地で古くから行われています。

こうした資源共有の試みは、いざ実践してみると様々な問題を生じました。関係者間の利害をうまく調整できず、結果として資源の乱獲や枯渇を招くこともありました。生態学者ギャレット・ハーディン（1915～2003年）はこの状況を「コモンズの悲劇」（1968年）と呼び、現在では経済学の原則のひとつとなっています。

著作物を扱うためのアプローチとしてのcommons

ところが近年この commons の考え方に再び注目が集まるようになります。著作物を取り扱うための新しいアプローチに「コモンズ」の考え方が取り入れられたからです。

基本理念は、知的財産権に基づき著作物に対して行使できる権利を作者自らが部分的に制限し、制限の対象としない部分を「知的共有地＝コモンズ」に置くというものです。そうすれば、利用者は作品にアクセスしやすくなり、社会全体においてクリエイティブな活動がいっそう盛んになることが期待されます。

「クリエイティブな活動を促進するコモンズ」を普及させるために発足したのがクリエイティブ・コモンズであり、その理念を具体化するために考案されたのが CC ライセンスです。

Publicもしくは Private

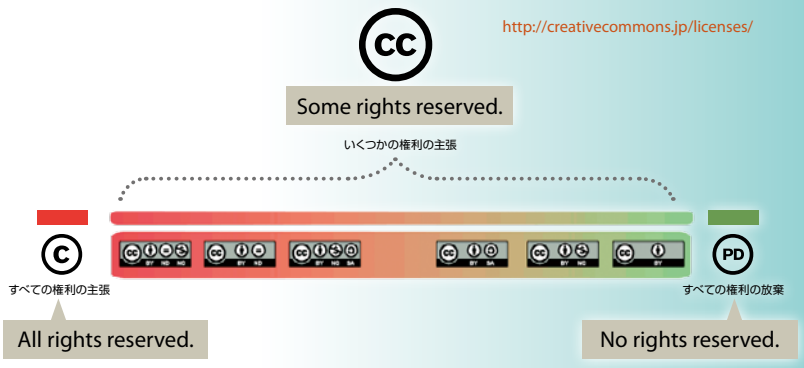
著作権法に基づく環境では、通常、作者が自身の作品の流通方法を決定するとき、private（フル・コピーライト＝すべての権利を保持する）か public（パブリック・ドメイン＝権利を保持しない）のどちらか一方しか選択できません。

パブリック・ドメインを選べば、流通がスムーズになり作品は広く利用されますが、作者は作品に対する著作権の行使を放棄することになります。フル・コピーライトを選べば、著作権の行使を放棄せずにすみますが、作品がスムーズに流通しなくなるおそれがあります。

こうした二元的な状況は、実は、作者にとっても作品の利用者にとっても非常に不自由です。またインターネットの普及によって、著作物の共有手段が急速に発達しました。「手間をかけずに作品を利用したい」という利用者と「利用者に今すぐ作品を提供したい」という作者の双方の願いを満たす有効な手段が模索され、その結果、考案されたのが CC ライセンスなのです。

CCライセンスは コピーライトとパブリックの中間

CC ライセンスが設定された作品は、作者の知的財産権が部分的に制限され、制限の対象とならない部分が「知的共有地＝コモンズ」に置かれた状態になります。



CC ライセンスが設定された著作物は、他者が利用しにくいほどガチガチに保護されていませんし、作者が一切の権利を放棄しているわけでもありません。フル・コピーライトとパブリック・ドメインの「中間」にあたる、“Some rights reserved.”と言われる状態になります。

ライセンスの種類やメリット、
JTF スタイルガイドと CC ライセンス
について、続きは WEB で
http://journal.jtf.jp/

2013年度第7回JTF翻訳セミナー報告

2013 年度第 7 回 JTF 翻訳セミナー

日　時　2014 年 2 月 13 日（木）14:00 ～ 16:40
開催場所　剛堂会館
テーマ　メディカル翻訳:クライアントの要求にどうこたえるか
～翻訳会社・翻訳者に求められる対応と、翻訳会社から翻訳者へ向けてのメッセージ～
講　師　株式会社ウィズウィグ メディカルドキュメント事業本部 翻訳部 部長
川原早霧
Sagiri Kawahara
報告者　津田 美貴（個人翻訳者）

Tokyo 13 Feb. 2014

今回のセミナー講師は翻訳会社でメディカル翻訳のコーディネーターとしてご活躍中の川原早霧氏。本セミナーでは、コーディネーターの立場から見てきたメディカル翻訳の移り変わりと、トライアルに合格できる翻訳者と合格できない翻訳者では何が違うのかなどについてお話し下さった。

メディカル翻訳について

メディカル翻訳と聞くと、基礎研究→非臨床試験→臨床試験→承認申請と審査→承認といういわゆる治験で必要となる翻訳を想像されるかもしれない。しかし、メディカル翻訳のなかには医薬品が販売された後の安全性情報に関する翻訳や、意外にも医薬品とはあまり関係のない社内文書などの翻訳も含まれる。これからメディカル翻訳を始めようという方は、まず社内文書などから挑戦してみるのもメディカル翻訳に触れるひとつの方法かもしれない。社内文書の内容は、他の業種にもみられるような、一般的な文書やメールも含まれる。ただし、このような文書は行間を読んで翻訳する必要があるため、ある程度想像力を働かせ「書き手がなにをいいたいのか」を行間から読み取らなくてはならない。英語力には自信があるが、治験関連の翻訳を始めるにはいまひとつ自信がないような初心者の方には、こういった社内文書の翻訳をメディカル翻訳の取り掛かりとして始めることをお勧めしたい（ただし、メディカル翻訳には治験に関する知識は必須）。

求められる翻訳の変化

ここ数年、求められる翻訳が変化してきたと感じている。約10年位前は翻訳の質が重視されていた。翻訳者重視で、その翻訳者が空くまで待つ会社も多かった。ところが、3～8年位前から、翻訳の質が重視されると同時に価格が重視されるようになった。加えて、約2～3年位前頃からは納期の短縮を求められるようになった。一般的なプロトコルの納期は1ヶ月程度から2～3週間程度へと短縮され、翻訳途中でスケジュールが変更されることもしばしば。予約案件や当局対応の翻訳予定について、確実に翻訳を終わらせるためにクライアントとの事前の打ち合わせが多くなったのもこの頃からだ。ここ1～2年は納期がさらに厳しくなり、翻訳が完成した部分から納品していく「分納対応」を求められるようになっている。原稿が作成される前に翻訳のスケジュールが確定していることもあり、原稿の最終版の完成を待たず、ドラフト版での翻訳の開始も多くなった。原稿作成の遅れによるスケジュール変更も珍しくなく、翻訳会社はスケジュール調整に四苦八苦し、翻訳者にとっては、直前のスケジュール変更により引き受けられるはずの案件を断ってしまった等の物理的な問題に直面することにもなってしまっている。

クライアントが求めるニーズの変更のなか、翻訳者には以前に比べてかなりの負担がかかるようになっている。その一例として、「治験薬概要書（IB）、治験実

施計画書、総括報告書」がほぼ同時期に発注されることが挙げられる。この3つの文書は重複する箇所が多く、コストを下げるという点でクライアントにはメリットがある。一方で翻訳者にとっては、文書間の重複する箇所は翻訳をしない、ということになるため、全体の翻訳が分かりづらい。

治験関連文書翻訳の際に注意をお願いしたいことは、翻訳の参考資料として渡される資料は必須資料と思って参照して欲しいということである。クライアントから翻訳会社へは翻訳会社が翻訳者へ渡すよりも多くの資料が提供されていることが多いが、そのすべてを限られた時間で翻訳者が参照することはほぼ不可能である。そのため、翻訳会社のコーディネーターは、どうしても翻訳の際に必要だと思われる資料だけを厳選して翻訳者に提供しているはずで、そういった参考資料は極力参照してほしい。参考資料にある用語や文章を用いて翻訳を行うことが、現状ではベストだと思われるからである。もちろん、使用にあたって注意すべき参考資料もある。例えば、①日英対訳でない場合、②日英対訳といえないこともないが内容としては間違っていないが対訳とは言い難い場合、③文書内で用語や表記の齟齬がある場合、④複数の参考資料がある場合である。このような場合には、クライアントの指示がケースバイケースであることも多いため、翻訳を開始する前や気づいた時点で翻訳会社のコーディネーターに参考資料の使い方や優先順位を質問されることをお勧めする。

当局対応に関連する照会事項や回答の翻訳は、分量としては A4半ページや数行が多く、長いと20ページになることもある。事前に予約が入ることが多いが、発注予定日に必ず入稿するかどうかは未定であることが多い。ただし、納品スケジュールはあまり変動しない（特に照会事項の回答の場合）。クライアントからは原稿はできていない（もしくは無い）が、スケジュールの都合上翻訳者を押さえてほしいという依頼がある。なぜなら、当局対応に関連する翻訳の場合には翻訳の開始からの納品まで数時間～最高でも48時間程度しかないからだ。翻訳を開始してからもクライアントからは「出来ているところまで送って欲しい」とか、「スケジュールを前倒しできないか」という連絡が来ることが多い。他にも、「他の翻訳会社が受けられないと言ってきたので、その分も対応できないか」や、「一部自分たちでやるから見直しをしてもらいたい」などの相談もある。

トライアルに合格できる翻訳とできない翻訳

トライアル翻訳は、エンドユーザーである製薬会社が求める翻訳に達しているか或いは達する可能性があるかどうかを確認するためのものである。「トライアルに合格できる翻訳」とは、①翻訳ができる（その人の知識レベルを知りたいわけではく、「翻訳ができるか」ということ）、②誤訳が無い、③訳抜けがない、④数値に誤りが無い、⑤文章の種類に応じた適切な翻訳ができている、⑥内容が理解できている、⑦参考資料が適切に使用されている、⑧原文の誤りに気づいてコメントが出せる、である。

反対に「トライアルに合格できない翻訳」とはこの逆で、翻訳ではなく文書の要約になってしまっている、誤訳がある、訳抜けがある、数値に誤りがある、用語など文章の種類に応じた適切な翻訳ができていない、内容が理解できていない、参考資料が適切に使用されていないということである。特に「誤訳がある、訳抜けがある、数値に誤りがある」は致命的である。トライアルで起こるミスは、その人が実際の翻訳で起こす傾向が高いミスだと考えられるからだ。その他に、意外と多いのが「取引希望価格が高い」こと。最初に「この価格でやりたい」と伝えた方がお互いに時間を無駄にしないで済むことが多いため、これからトライアルを受ける方にはその点を明確にしておくことをお勧めしたい。現状、翻訳の仕事が減っている翻訳者には、取引希望価格を下げれば仕事がくることもあるかもしれないが必ずしもそうとは言えない。取引希望価格を下げても案件が来ないのならば、そもそもの翻訳の質に不満がある（質の問題）と思った方がよい。

トライアル翻訳以外での評価ポイントとしては、「ファイルを受け取りました」などのレスポンスがある、原文に上書きできるか（スタイル設定で原文に上書きできる）、実務経験がある、などがある。

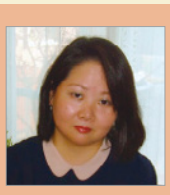
問題外なのは、インターネット上にトライアルの内容や過去に担当した翻訳についての質問をしている場合。文章の内容を人に話すのは NG で、機密保持違反である。

最後に

以上のようにクライアントが求める翻訳の質とスピードが変化し、納期の短縮、コストの削減、クオリティの保証は翻訳者の協力がなければ実現できない。もちろん、翻訳会社、コーディネーター側も翻訳者が翻訳に集中できるように協力していくが、翻訳者の皆さんにも、取引価格の変更、体調管理、常に一定レベルで翻訳できるようにしていただけるようにお願いしたい。

また、翻訳者やチェッカーの方もコーディネーターを上手く利用していただきたい。例えば、依頼された際に「無理です」ではなく、「いつからならできる」や「どの位の分量ならできる」と逆に提案していただけると、分量を加減して依頼したり他の案件をお願いしたりといったことが可能だ。例えば AM3時から作業を開始できる方ならば、前日の22時に原稿をお渡しして AM9時に納品してもらうような案件を依頼することができる。

選ばれる翻訳者、翻訳会社であるためにはこれまでと同じことをやっていてもニーズに追いつけない。多少高くても買いたいと思ってもらえるような翻訳者、翻訳会社になるためにもお互いに協力できるところは協力しあって、お互いの付加価値を高めていければと思っている。



川原早霧
Sagiri Kawahara

PROFILE

株式会社ウィズウィグ　メディカルドキュメント事業本部 翻訳部 部長
ペンシルバニア州立ミラーズビル大学心理学部卒。前職において通訳会社に通訳の手配を依頼した際に、はじめてコーディネータという職種に触れ、興味をひかれる。その後、株式会社ウィズウィグに入社。現在は同社において翻訳コーディネータとして勤務。

2013年度第8回JTF翻訳セミナー報告

2013 年度第 8 回 JTF 翻訳セミナー

日　時　2014 年 3 月 13 日（木）14:00 ～ 16:40
開催場所　剛堂会館
テーマ　即戦力がつくグローバル・ライティング
～日本人の弱点：英文特有の思考表現（ディスコース）を考える～
講　師　慶應義塾大学ビジネス英語担当講師・慶應義塾大学外国語教育研究センター所員
日向清人
Kiyoto Hinata
報告者　津田 美貴（個人翻訳者）

Tokyo 13 Mar. 2014

今回のセミナー講師は日向清人氏。昨年関西で開催された氏のセミナーは大盛況で「ぜひ東京でも講演を」というリクエストがあり今回実現した。本セミナーでは、英文特有の思考表現（ディスコース）についてお話し下さった。

コミュニケーションとしてのライティング

英文ライティングは所定の英語運用能力（一定以上の単語力と文法知識）があればできるとされているが、はたしてそうであろうか？もしこれが正しければ、辞書を引き引き英訳したものがそのまま「英文」として通用するはずである。少なくとも、英語として通用する文章を書くためには、作文類型ごとの作法がわかっていなければならず（＝社会言語能力）、さらに「つながっており」「筋道が通って、ひとまとまりと認識される」一体感が必要だ（＝言語運用能力）。このワークシップではこういったライティングにおける英語らしさ（texture）を確保するスキルを紹介し、演習を通じて体得していただけるよう構成した。

コミュニケーションとは

単語力と文法知識だけでは、通りのいい自然な英文を書いたり、ネイティブに通じる英語を話したりすることはできない。つまり、コミュニケーションが取れたとはいえない。

ここでいう“コミュニケーション”は、日本語のカタカナでいう「コミュニケーション」ではなく、「communication」のことである。その分野の専門家によると”communication” には122の定義があるそうだ。その中で一番わかりやすいと思ったのが、“knowing how, when, and why, to say what to whom” という National Standards for Foreign Language Learning in the 21st Century に載っていた定義だ。how ＝文法、what ＝単語力のことであるから、文法と単語力だけでは when+why+to whom が足りない。

では、この when+why+to whom は何かというと、コンテクスト（context）と呼ばれるものである。コンテクストは「状況や関係」のことであり、同じ単語でもどういう状況でその単語を使ったかによって意味が異なってくる、ということである。

コンテクストという観点からみると、「暗黙の了解」、「一を聞いて十を知る」という前提で成り立つ日本語はハイコンテクストと呼ばれる。対照的に「実際に言った言葉、説明する文章に重きが置かれる」、すなわち「一を説明するのに十教えないといけない」英語はローコンテクストである。つまり、日本語と英語ではコンテクストが全く異なるのだ。

伝えたいコンテンツの生成と伝達にあたり、相手がある以上、当然、抽象的・具体的コンテクストが前提となる。抽象的 / 社会的コンテクストとは、すなわちジャンルのことで、例えば、レシピ、ITマニュアル、契約書、経理書類など。具

体的 / 状況コンテクストとは、例えば同じ法律文章でも、相続に関することなのか契約に関することなのかで内容や文章が変わってくる、ということを指す。

コミュニケーション能力の要素

コミュニケーション能力の要素は、①言語知識（単語・文法・発音）、②社会言語能力（妥当性）、言語運用能力（ディスコース運用能力）である。

言語知識とは、語彙・文法、コンテクストに即した言語把握、アクセントの位置・リズム・イントネーション、正しく字を書く力、字を見て音に変換する力のことである。

社会言語能力とは、「相手を見て、相手を気遣って言葉を選べているか」ということで、定型的あいさつ・呼びかけ方・話し手の交替、丁寧な言い方・乱暴な言い方、格言・名言・決まり文句、フォーマルからインフォーマル、標準語・方言・階層別の言葉づかいなどを場面に応じて使い分けることである。

ディスコースとは複数のメッセージ / センテンスをつなげ、筋の通った話としてまとめることである。

ディスコースとはなにか

ディスコースとは、テキストとコンテクストに基づき「つながり」と「まとまり」を認識できる言葉ということである。テキスト（文字・文章）とは「コミュニケーションに供される“複数の”センテンス / メッセージ」のことで、コンテクストとは「前後の文脈＋当事者が認識している状況＋ジャンル」のことである。ジャンルとは作文類型のことで、例えば、契約書なのかレポートなのかというような違いを指す。「つながり」と「まとまり」とは、整合性があって、流れが自然であり、個々のロジックをつないでいく（前後のつながりを論理的に）、系統だったロジックでつなぐということである。

つまり、文章というのは目的別にスタイルが違うのでそれに合わせたものを使わなくてはならない、ということである。

例えば、議事録なら、報告書というジャンルで、関係者名、日時・場所などの基本情報を示し、時系列に沿って出来事を記されたものであるはずである。料理のレシピなら、指図する書面または説明というジャンルで、目的（料理名）を明らかにし、必要な材料を指示し、手順を説明する、という流れで書かれているか、話されるはずである。

文章は目的別にスタイルが違うのはもちろんだが、それに見合った単語を使う必要もある。例えば、治験レポートならば、薬の名前、分類、どういうものなのか、それが何をするか（アクション）という流れで一般的には書かれているはずである。この中で、名前、分類、どういうものなのかという文章では be 動詞が使われているはずであり、治験に関することは過去形で書かれ、効果や意見は現在形で書かれているはずである。もし、治験に関することが現在形で書かれたり、効果や意見が過去形で書かれたりしていたら、読者は違和感を覚えるはずである。

また、コロケーションも大切である。例えば、曲を作るとはいうが、曲を創造するとは言わない。これがコロケーションである。気を付けてほしいのは、イディオム（句動詞）とコロケーションはイコールではない。句動詞は字面からでは意味がわからない（ex. Take off = depart）だが、コロケーションはどちらもよく見かける単語という違いがある。

最後に

まともな英文と認識してもらうためには、①つながっており、②まとまりがある、文章であることが求められる。②のまとまりを確保するためには、抽象的・具体的コンテクストが重要で、中でも抽象的コンテクストすなわち英語文化固有のジャンル（作文類型）がものをいう。

英語は一回使い心地を確かめると自分のものになるといわれているので、今回の演習で行ったように日ごろから英作文（英借文）を行い、コロケーションやジャンル別のスタイル、使用する英語の動詞などに注意していたくと、英文に磨きがかかりより英語らしい英文になっていくと思う。

感想

セミナー終了後この報告書をまとめていても、「ディスコースとは何か」がうまくまとまらない。というより、自分なりに消化できていない。なんとなくこうかな？とは理解できているのだが、これを他人に教える・伝えるとなると非常に難しい。これがもしかすると「翻訳の難しさ」とイコールなのかもしれないとふと思った。

日向清人
Kiyoto Hinata

PROFILE

慶應義塾大学ビジネス英語担当講師・慶應義塾大学外国語教育研究センター所員
慶應義塾大学大学院修了。桝田江尻（現あさひ）法律事務所、モルガングレンフェル証券、ブルデンシャル証券を経て独立し、金融翻訳会社を設立し、外資系金融機関のための翻訳におよそ10年従事。その傍ら慶大講師（ビジネス英語）。元 NHK ラジオ「ビジネス英会話」講師、元ケンブリッジ英検面接委員。3歳のときに英語を話し始めて以来、英語とは60年近いつきあい。
著作は、5万部超の『即戦力がつくビジネス英会話』（DHC）をはじめ多数。『即戦力がつく英文ライティング』（DHC）、『【最新】経済・ビジネス英語2万語辞典』（日本経済新聞出版社）、『ビギナーのための法律英語【第2版】』（慶應義塾大学出版会）等。現在、学校文法に言葉の社会的役割を加味した「機能英文法」の本を執筆中。
他に月間アクセス10万超のブログ「ビジネス英語雑記帳」（アルク）にて学習者向けの記事を執筆中。

海外論文紹介

Paper

高取 由紀 Yuki Takatori

"More Japanese than the Japanese : Translations of Interviews with Foreigners"

インタビューの翻訳：終助詞の使い方で変わる話者のイメージ操作

JTF 理事　**佐藤晶子**

はじめに

ソチオリンピック終了1か月後に行われたフィギュアスケート世界選手権で、男子はオリンピック金メダリストの羽生結弦が逆転優勝した。[*1] 女子はショートプログラムで2010年に出したキム・ヨナの記録を書き換える世界最高点を獲得した浅田真央が、フリーの演技でも高得点をあげ、3度目の世界選手権優勝を手にした。[*2] 大会優勝者に対してはインタビューが行われ、人々は新聞やインターネットで配信されるニュースのスポーツ欄に掲載された多くのインタビュー記事を読むことができる。

本稿では、日本のメディアで外国人選手らに対するインタビューを翻訳する際にイメージ操作が行われていると指摘する、近々アメリカの ***Perspectives: Studies in Translatology*** という雑誌に出版予定の高取由紀氏の論文を紹介する。合わせて、日本のメディアで配信されるインタビューの翻訳で外国人選手のイメージ操作が行われているのか、行われているならどう行われているか、インタビュー記事などを担当する翻訳者は今後どう対応するかについて考える。

1. 日本語の終助詞が与える印象

米国の大学で日本語を教授し、東京裁判等の日米関係史にも詳しい言語学者の高取由紀氏は、日本のメディアの外国人選手に対するインタビュー記事における会話の訳し方、特に終助詞の決定によって記事におけるアスリートの印象が大きく変わることに注目している。終助詞とは、文や句の終わりに用い、疑問・禁止・詠嘆・感動などの意を表す助詞であり、「か（疑問）」「な（禁止）」「ぞ」「ぜ」「さ」「ね」「わ」などの品詞を言う。[*3]

現代日本語には会話における男女の言語差はほとんどない。ところが、外国人による会話の日本語訳にはそれが強調されており、特にスポーツ記事に著しい。同氏はさらに、この慣習は、外国人をアニメのキャラクターまたはアクション・フィギュアのように扱うのと同然であると批判している。[*4]

Introducer

佐藤晶子
Akiko Sato

PROFILE

外為専門銀行勤務を経て翻訳業へ。翻訳・通訳業務を続け大学院で言語文化学（日米関係史）を専攻。現在翻訳、通訳、大学非常勤講師業務に従事。JAT 通訳分科会委員長。JTF 内 ISO 検討委員会委員。JTF 理事

＊1　NHK.「羽生結弦が世界選手権初優勝」『NHK NEWS　WEB』（NHK, 2014年3月28日），（2014年3月31日アクセス）http://www3.nhk.or.jp/news/html/20140328/k10013334101000.html.

＊2　日本経済新聞社「浅田真央が優勝　世界フィギュア、自己ベスト更新」『日本経済新聞』（日本経済新聞社，2014年3月29日），（2014年3月31日アクセス）http://www.nikkei.com/article/DGXNASDH2904H_Z20C14A3000000/.

＊3　新村出編「終助詞」『広辞苑』第6版（岩波書店，2008年）

＊4　Takatori, Yuki（2014）"More Japanese than the Japanese: Translations of Interviews with Foreigners." ***Perspectives: Studies in Translatology***（Accepted for publication）. 15-19. ；

2. 終助詞を使い分ける翻訳が意図的に生み出す乖離

同氏は、東京学芸大学教授谷部弘子氏がその論文の中で引用した1996年8月の「インタビュー　無神経な翻訳」と題された投書における指摘を取り上げている。[*5] 1996年、アトランタオリンピック陸上100メートルの金メダリスト、ジャマイカ出身のドノバン・ベイリー選手に対するテレビインタビューのテロップで以下のような訳文が流れた。テロップはベイリーの会話を正確に表していないという指摘である。この翻訳テロップに対し、高取氏は以下のような英訳（back translation）を施している。（ベイリー選手：ベ、翻訳テロップ：翻、高取氏が英訳した翻訳テロップ：高）

ベ：**If you work hard, you will get results.**
翻：努力をすれば、結果はついてくるんだ**よ**。
高：**Work your ass off, you're gonna kick some serious butt!**

ベ：**My goal is to run as fast as I can. I would like to run a perfect race.**
翻：目標はできるだけはやく走ることさ。完璧なレースをしたいと思う**よ**。
高：**I just wanna run fast, period. I'm gonna run a perfect rave, end of story, know what I'm sayin'?** [*6]

高取氏は、原話者の英語と翻訳の間に心情的な乖離があると指摘している。通訳者なら当人と直接会い、横にいて訳すことからこうした心情的な乖離現象は比較的少ないが、原話者に直接会わず、テキストから訳文を作成する翻訳の現場において、終助詞を翻訳者が作り上げたイメージに合わせて巧妙に追加することにより、こうした乖離現象が起きると分析している。[*7]

3. 終助詞による過剰な性差表現

同氏はまた、棒高跳びの世界記録保持者であるエレナ・イシンバエワ選手に対するインタビューの新聞記事の翻訳を考察している。（新聞記事の翻訳：翻、高取氏が英訳した翻訳されたイシンバエワ選手の会話：高）

翻：最後は有名な歌手とか女優の**気分だったわ**。（朝日新聞）
高：**In the end, I felt something like a famous singer or actress.**

翻：有名な歌手や女優になった**気持ちだった**。（読売新聞）
高：**I felt like I became something like a famous singer or actress.**

翻：次の目標は**ロンドンね**。（朝日新聞）
高：**The next goal is London.**

翻：次のゴールは**ロンドン五輪**。（読売新聞）
高：**The next goal is the London Olympics.** [*8]

高取氏は上記のように、文末に終助詞を付けた語彙を選ぶことにより性差をより強調した朝日新聞社と中性的な表現を採用した読売新聞の記事を並べ、比較している。同氏は、この差は翻訳者の性に対する先入観の違いであると指摘している。また同氏は、北京オリンピック陸上男子100メートル、200メートル、400メートルリレーで金メダリストとなり「世界最速の男」と言われたウサイン・ボルトのNHKテレビ番組のインタビューで流れたテロップで、ボルト自身を「オレ」と翻訳した放送を指摘した太田氏の論稿に触れている。[*9]

翻訳者の恣意的な操作によって性差が露骨に表現された話者のイメージが出来上がる。この性差の違いを極端に強調することで原話者である外国人選手のイメージをアニメキャラクターのような存在に作

＊5　Takatori, Yuki（2014）. 3-4.；谷部弘子「新聞報道の外国人談話に見る男女差：文体と終助詞使用の関係を中心に」『ことば』（17），（現代日本語研究会，1996年），58.
＊6　Takatori, Yuki（2014）. 3-4.；谷部弘子（1996年）58-72.
＊7　Takatori, Yuki（2014）. 15-18.；筆者は、インタビューで翻訳対象となる外国人選手等の話者を「原話者」と表記する。
＊8　Ibid. 16.；堀川貴弘「イシンバエワ世界新」『朝日新聞』2008年8月19日（朝日新聞社，2008年），大野展誠「[北京五輪] 第11日陸上女子棒高跳び：イシンバエワが世界新で連覇」『読売新聞』2008年8月19日（読売新聞社 , 2008年）
＊9　Ibid. 5.；太田眞希恵「ウサイン・ボルトの“I”はなぜ [オレ] と訳されるのか」『放送研究と調査』（放送文化研究所，2009年3月），（2014年3月31日アクセス）http://www.nhk.or.jp/bunken/summary/research/report/2009_03/090305.pdf.

り変えてしまう。つまり、成熟した人間ではなく、語彙の少ない子どものような扱いをしているのではないかと、同氏は危機感を抱いてもいる。[*10] 翻訳者はこうした恣意的な操作について慎重になるべきである。

4. 気になる主語の置き換え

本項では、外国人選手のインタビュー記事の翻訳における、終助詞以外で原話者を子ども扱いする表現、年齢不相応の表現についても触れる。最近、以下の記事が目についた。イングランドのサッカーチーム、チェルシーの主将を務めるジョン・テリー選手の去就について日刊スポーツと英国のスポーツニュースサイトが次のように報じている。（翻：日刊スポーツ記事タイトル、News: Mail Online 記事タイトル）

翻：ジョン・テリー「僕の時代は終わった」（日刊スポーツ）

News: **Terry: My England days are gone... things have changed and I've moved on**（Mail Online）[*12]

紙面の都合もあるだろうが、日刊スポーツの翻訳は後進に道を譲る発言をしたイングランドのサッカーチームの主将を自ら「僕」と呼ばせ、他の会話を割愛して短いヘッドラインでまとめている。「僕」を「私」に変えたほうがジョン・テリーの年齢相応（33歳）の発言になると感じたのは筆者がサッカーやジョン・テリー選手をよく知らないからであろうか。[*13]

広辞苑によると「僕」は「成人前の男性が同等以下の相手に対して使う」名詞である。この定義によれば、「僕」と掲載した不特定多数の読者を対象とした記事は、極端な話ではあるが、（何等かの理由で成人前と想定する）33歳のジョン・テリーが成人前（と想定した）の読者に対しある種の「上からの目線」で会話していることになる。[*14]

まとめ

高取氏は、同氏の論文でメディアに取り上げられる外国人アスリートらのインタビューが日本でどのように翻訳されてきたか、先行研究者の批判を含め紹介している。日本語の終助詞を中心とした翻訳の意図的な性差表現、外国人選手の印象について翻訳が関わる重要性について、同氏は通訳者とは異なり、原話者に直接関わることがない翻訳者による原話者のイメージ操作は過剰に行ってはならないと警告している。

主に「終助詞」という言語学的観点から検討した高取氏の指摘を重く受け止め、翻訳に携わる者として性差を含めた過剰なイメージ操作にならぬよう、十分に配慮するべきである。と同時に、翻訳者の役割とは何かを考えざるを得ない。

しかし、読者の気持ちに寄り添いながら翻訳成果物を提供する側として同氏の指摘に反論もするべきであろう。読者に近いのは誰か。本当に翻訳者がイメージ操作をするのか。メディアの編集者がメディアの方針としてその一端を担っているのではないか。外資系通信社の記事を翻訳した経験がある筆者は、翻訳者よりも、むしろ編集担当者による記事全体のイメージ決定権が大きいのではないかと考える。こうした問いかけを今一度発し、不特定読者を想定し、読者の側に立ちながら、インタビューされる原話者の心情や現状に沿った誠意ある翻訳を提供することも翻訳者としての役割であると拝察する。

＊10 Takatori, Yuki（2014）. 15-18.

＊11 日刊スポーツ新聞社「ジョン・テリー［僕の時代は終わった］」『nikkansports.com』（日刊スポーツ新聞社，2014年3月10日），（2014年3月31日アクセス）http://www.nikkansports.com/soccer/world/news/f-sc-tp3-20140310-1268289.html

＊12 Craig Hope, "Terry: My England Days Are Gone... Things Have Changed and I've Moved on," Mail Online, March 08, 2014, section goes here, accessed March 31, 2014, http://www.dailymail.co.uk/sport/football/article-2576401/John-Terry-My-England-days-gone-things-changed-Ive-moved-on.html.

＊13 中村桃子『「性」と日本語』（日本放送協会，2007年）. 59. ;興味深いのは中村氏によると、「僕」は「（男の）標準語」である。それに対し「オレ」は「男ことば」である。「翻訳がつくるアイデンティティ」として、翻訳小説における性差に関し翻訳の役割の重要性を指摘している。

＊14 新村出編「僕」『広辞苑』第6版（岩波書店，2008年）

参考文献(ページ数は脚注に記載)

Craig Hope, "Terry: My England Days Are Gone... Things Have Changed and I've Moved on," Mail Online, March 08, 2014, section goes here, accessed March 31, 2014, http://www.dailymail.co.uk/sport/football/article-2576401/John-Terry-My-England-days-gone-things-changed-Ive-moved-on.html.

堀川貴弘「イシンバエワ世界新」『朝日新聞』2008年8月19日（朝日新聞社，2008年）

中村桃子『「性」と日本語』（日本放送協会, 2007年）NHK.「羽生結弦が世界選手権初優勝」『NHK NEWS WEB』（NHK, 2014年3月28日），（2014年3月31日アクセス）http://www3.nhk.or.jp/news/html/20140328/k10013334101000.html.

新村出編『広辞苑』第6版（岩波書店，2008年）

日刊スポーツ新聞社「ジョン・テリー［僕の時代は終わった］」『nikkansports.com』（日刊スポーツ新聞社，2014年3月10日），（2014年3月31日アクセス）http://www.nikkansports.com/soccer/world/news/f-sc-tp3-20140310-1268289.html.

日本経済新聞社「浅田真央が優勝　世界フィギュア、自己ベスト更新」『日本経済新聞』（日本経済新聞社，2014年3月29日），（2014年3月31日アクセス）http://www.nikkei.com/article/DGXNASDH2904H_Z20C14A3000000/.

大野展誠「［北京五輪］第11日陸上女子棒高跳び：イシンバエワが世界新で連覇」『読売新聞』2008年8月19日（読売新聞社，2008年）

太田眞希恵「ウサイン・ボルトの“I”はなぜ［オレ］と訳されるのか」『放送研究と調査』（放送文化研究所，2009年3月），（2014年3月31日アクセス）http://www.nhk.or.jp/bunken/summary/research/report/2009_03/090305.pdf.

Takatori, Yuki（2014）“More Japanese than the Japanese: Translations of Interviews with Foreigners.” ***Perspectives: Studies in Translatology***（Accepted for publication）.

谷部弘子「新聞報道の外国人談話に見る男女差：文体と終助詞使用の関係を中心に」『ことば』(17)，（現代日本語研究会，1996年）

その他の参考文献

因京子「談話ストラテジーとしてのジェンダー標示形式」」『日本語とジェンダー』佐々木瑞枝監修日本語ジェンダー学会編（株式会社ひつじ書房, 2006年）53-72.

小林千草「女は文末に何をこめる？」『女ことばはどこへ消えたか？』（光文社新書, 2007年）42-103.

水本光美「テレビドラマと実社会における女性文末詞使用のずれにみるジェンダーフィルター」『日本語とジェンダー』佐々木瑞枝監修日本語ジェンダー学会編（株式会社ひつじ書房, 2006年）73-94.

中村桃子「第7章天皇制国家の伝統となった［女ことば］：植民地支配の正当化」『「女ことば」はつくられる（株式会社ひつじ書房, 2007年）204-221.

任利『「女ことば」は女が使うのかしら？：ことばにみる性差の様相』（株式会社ひつじ書房, 2009年）51-74.

宇佐美まゆみ「第11章［ね］のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス」『女性のことば・職場編』松本功, 現代日本語研究会編（ひつじ書房,1997年）241-268.

Lost in Translation Company

MISSION STATEMENT

YAMAGATA EUROPE では 2009 年から機械翻訳を採り入れ、現在では複数のプロジェクトに使用しているそうです。

今回の寄稿者である石川さんにお会いしたきっかけは「機械翻訳」でしたが、彼との会話の根底には「翻訳」はあくまでも人間の仕事という共通認識がありました。産業分野のドキュメントであっても、機械による翻訳が人間の介在なしに完全な「翻訳」になることはないという事実をごまかすことなく、その夢の技術の実力を以上でも以下でもなく冷静にみつめている、という印象を受けました。

石川さんの人懐こい笑顔の向こうには、夢の技術を現実の技術として最大限活かしていくために、自分達は地道な努力を続けているのだ、そんな静かな自負と真摯な想いが感じられました。

「翻訳会社社員の等身大の声」をテーマとした本連載もこれで最終回です。

寄稿者それぞれの立ち位置から語られた言葉達のどれもが、真に等身大の声であったことを本当に嬉しく思っています。

Column 01 Owner

矢野直子
Naoko Yano

PROFILE

PFU ソフトウェア（株）のドキュメント制作部門に所属。テクニカルライタを経て現在は社内翻訳者兼チェッカー。IT 系ドキュメントの英日翻訳と、機械翻訳の活用に関する調査を担当。「ほんやく互学会」メンバー。石川県在住。

■ PFU ソフトウェア（株）
ソフトウェア開発／
マニュアル制作・翻訳（ローカライズ）
http://www.pfu.fujitsu.com/psw/

機械翻訳との対峙

YAMAGATA INTECH
石川守哉

いきなりこう切り出すのもおかしいのですが、私は一般的な翻訳会社の社員らしい業務を経験したことがないかもしれません。会社にはテクニカルライターとして入社し、日英のマニュアルのライティングに従事してきました。マニュアル制作の一工程である翻訳の役割は内容的にも時間的にも大きかったのは事実です。しかし私の担当はあくまで翻訳用の原稿・参照資料の入稿をはじめとする翻訳者へのディレクションであり、例えば翻訳者が使う翻訳支援ツールがどういうものか、どういう作業ができるかは知っていても、実際に自分で作業を見る、ツールそのものを実際に扱うことはありませんでした。しかも、翻訳といっても何十言語という多言語を扱っていたため QA 作業も特殊でした。

その後、社内の翻訳部署に配属されました。それにもかかわらず、どうして一般的翻訳業務を経験していないと感じるかというと、私の担当が翻訳は翻訳でも機械翻訳だったからです。

ご存じのとおり、機械翻訳は一方でもてはやされ、一方で毛嫌いされる厄介な存在です。具体的にいうと、クライアントからは相当の期待をかけて求められるものの、翻訳者にとって迷惑と手間、そして最悪の場合価格破壊の元凶でしかないからです。その二つの利害の間に立つ翻訳会社にとって、これ以上取扱いづらい存在はありません。できれば関わりたくないもの、板挟みにあう分、翻訳者側の立場の方が近いかもしれません。

業界内での煙たがられる立場をのぞけば、これほど将来の夢を描かせてくれる技術は貴重で、とても興味深いという一般的意見には同意します。幸いというべきか、不幸にもというべきか、私は従来の翻訳の経験値が低いために、それを基準に考えなかった。そのため、翻訳会社社員として一般的に抱く可能性が高いネガティブな先入観が最初からありませんでした。

とはいっても、某無料自動翻訳の一般ユーザーと同じく、多少その精度に懐疑的だったのは確かです。特に我々ネイティブである日本語への機械翻訳には厳しい目を向けざるをえなかった。ただ私の場合、欧州のオンラインスポーツ新聞記事を見るのが個人的に好きで、その現地語記事を英語に機械翻訳していたことがあり、そのときの印象がわりとよかったのです。その好印象のおかげで私は機械翻訳をサービスとして考える際にポジティブになることができました。

そして、機械翻訳が根本から「翻訳」とは違うということを考え始めるようになります。

Lost in Translation Company

それは、翻訳に携わる人々が、主にその品質の程度を理由に「翻訳」とは関係ないと半ば気に留めなかった自動翻訳サイトの存在が原因でした。

賛否の否、清濁の濁の方が目立っていたサービスですが、ユーザーは検索サイトを利用するように気軽にそのサービスを利用します。

最初はこの程度の精度のものにお金を払う価値がないから、無料で使う。無料だから多少精度が基準値を下回っていても気に留めずに、とりあえず使ってみる。次第に、文の意味を理解するだけであれば、案外使えるかもしれないと思うようになる。

不特定多数がこのサービスを利用するたびに、そのサービスの精度は理論上向上する。知名度やユーザビリティ、何よりフリーという最強の武器をふるって密かに、そして着実に浸透していくというこの筋道はもはや「翻訳」という枠内にはないものです。また、某大手 IT 企業が運営しているその自動翻訳サービスは、彼らが運営するたくさんのコンテンツの中の一つに過ぎないのです。

だからといって、「翻訳」はこのサービスと関係ないと言うわけにはいきません。問題は、「翻訳」を利用する側にとって、「翻訳」も自動翻訳サービスも違いはないことです。もちろん、実際にその差はあるので、その違いを説明することはできます。しかし例えば、コスト削減を命題に掲げて利用する側にとって、自動翻訳サービスは救いの一手に見えます。この現実は 10 年前には考えられなかったのではないかと思います。

アニメ「ドラえもん」の中で登場する道具に、食べると自分の話す言葉が相手の言葉に翻訳される「ほんやくこんにゃく」という有名な道具がありますが、機械翻訳はどこでもドア（瞬間移動）やタイムマシン（時間移動）といった SF の定番分野と肩を並べるほどの夢の技術だったはずです。そんな夢が今ではいつでもどこでも無料で利用することができます。

そういうわけで、自動翻訳サービスの一番の功績は、夢の機械翻訳を身近な技術にしたことにあると私は考えています。功績としたのは、さすがに世の中の進歩を讃えないわけにはいかないと思うからです。

「翻訳」を生業とする人々が、この状況を脅威と捉えるか、チャンスと捉えるか、本当はどちらが正解なのかはわかりません。未来や先端技術の犠牲になったものはいくらでもあると思いますが、ただ「翻訳」がそうなってはならないとは思います。

それは、携帯電話の普及によって、その進化をやめた公衆電話を進歩させることと同じくらい難しいことも中にはあるかもしれません。しかしまた、携帯電話自体の進化についていき、スマートフォンの機能やアプリの一部になることのような、潮流に逆らわないやり方がきっとあることも信じています。私は、某大手 IT 企業のサービスが作り上げた数あるサービスコンテンツの一つ（自動翻訳サービス）と、どう差別化してビジネスにしていくかを考えることが私の仕事の重要なファクターだと思っています。

そんな中、機械翻訳と向き合うことは、自分自身と向き合うことに似ていると感じることがあります。過剰な評判、不当な評価、矛盾やジレンマにどう対処するか。そして最終的にどう前進するか。これは自分の弱さにどう対処して生きて行くかにも似ているなと。まさに今試練のときに身を置いているのかもしれません。

Writer Profile

石川守哉
Moriya Ishikawa

2008年 YAMAGATA INTECH 入社。制作部に所属し、テクニカルライターとしてカメラや AV 機器を中心とした日英他言語のマニュアルを制作。2011年翻訳ビジネス部に配属後、翻訳ツールの開発に携わりながら、MT（機械翻訳）の R&D、関連プロジェクトマネジメントを担当。2013年12月よりベルギーにあるグループ会社 YAMAGATA EUROPE に赴任となり、MT サービスの新規開発、関連プロジェクトマネジメントに従事する。

フリースタイル、翻訳ライフ

MISSION STATEMENT

「意外と知られていないフリーランス翻訳者の素顔をさぐる」ために始まったこのシリーズですが、丸2年経ってみると、フリーランス翻訳者の実態も「けっこう知られるようになってきた」ように思います。この間に、翻訳者の SNS 利用率もすっかり増え、Facebook などでもその日常は垣間見えるようになってきて、このコーナーの役目もちょっと一段落というところです。そこで、これからは、今までとできるだけ違う生活をしていそうな翻訳者にご登場いただこうと思っています。

そこでまず、今年度前半は、JTF ほんやく検定の1級合格者3人の最近の様子をうかがってみることにしました。

Column 02 Owner

高橋 聡
Akira Takahashi

PROFILE

CG 以前の特撮と帽子をこよなく愛する実務翻訳者。翻訳学校講師。学習塾講師と雑多翻訳の二足のわらじ生活を約10 年、ローカライズ系翻訳会社の社内翻訳者生活を約8 年経たのち、2007 年にフリーランスに。現在は IT・テクニカル文書全般の翻訳を手がけつつ、翻訳学校や各種 SNS の翻訳者コミュニティに出没。

■ブログ「禿頭帽子屋の独語妄言」
http://baldhatter.txt-nifty.com/trados/

不明瞭な会社の将来像と明瞭な自身の将来像

情報技術系特許翻訳者
中村泰洋

リンゴプロ翻訳サービスの中村と申します。一応、情報技術系の特許翻訳者ですが、元々は IT ローカライズが中心でしたし、ビジネス／マーケティング、スポーツ、自動車・機械といった分野の翻訳も手がけておりますので、何翻訳者かということにはあまりこだわっていません。業歴は通算15年ほどで、2012年には JTF 翻訳祭にも翻訳者として登壇させていただきましたが、家庭の事情等により、翻訳者としてのキャリア追求が困難となったことから、2013年に事業を法人化し、会社を設立しました。「リンゴプロ」という社名には、当然のことながらさまざまな意味付けをしていますが、米アップル社の成功にあやかりたいという浅はかな理由も小さくありません。とはいえ、私はアップル製品を1つも持っていません。

会社と言いましても、今のところ社員は私だけです。現在の仕事は、情報技術／コンピュータ関連、自動車部品、医療機器といった分野の英日の特許翻訳をメインに日英が少々。さらに、IT 系ニュースサイトの英日翻訳と、地元オープンカレッジ講座での翻訳指導も手がけています。翻訳指導はフリーランス時代からもう10年以上続けており、ほぼライフワークと化しています。

ほんやく検定で3度目の1級合格をいただいた2011年ごろから打診や引き合いが増え、翻訳の方はここ数年で専門特化が進んできましたが、その分他の仕事が増えてきました。現在は翻訳以外に、翻訳支援ツールの開発支援およびアドバイス、翻訳者向けパソコンのプロデュース、海外某社のトライアル評価・合否判定なども手がけています。さらに翻訳者の育成にも力を入れており、少量・長期の翻訳プロジェクトを、潜在能力と意欲があると私が判断した新人翻訳者に依頼し、そのチェックとフィードバック、ウェブサイトへのアップロードを行っています。

仕事が多岐にわたるということには、専門性が高くないという理由もありますし、リスク分散という目的もありますが、「人とは違う変わったことがやりたい」という純粋な欲求が根底にあります。専門特化こそが翻訳者としての王道であることは百も承知なのですが、「珍しいね」とか、「変わっているね」とか、「そんな人他にいないよね」などと言われるのが、私はこの上なく幸せなのです。特に3つ目の言葉は、「馬鹿じゃないの？」という含みが込められている場合でさえ、誇らしい賛辞に聞こえます。

コラムタイトルが「フリースタイル、翻訳ライフ」ということですので、日常生活にも少し触れておきましょう。

現在の生活サイクルは、5時過ぎに起床。家族が寝ている時間に少し翻訳をした後、朝食・昼食を挟んで夕方まで仕事をします。仕事ぶりは我ながら実にだらしなくて、リサーチのために

ウェブ検索を始めたのに、気が付くと YouTube で Bon Jovi や Van Halen の古い PV を見ているという有り様で、愛用のパソコンデスクには、翻訳という仕事には不似合いな JBL のスピーカーが理想的な位置に居座っています。この生まれながらの集中力・注意力欠乏症により、これまで数々の失敗を犯し、取引先にも迷惑をかけてきました。そのため今は、Trados を始めとした翻訳支援ツールと、共同開発の訳漏れ防止・訳語統一ツール、さらには翻訳ソフトをバランスよく組み合わせることで、ミスの低減と精度・一貫性の向上を図っています。前の世代の翻訳者が見たら、噴飯物と失笑するか、怠け者と一喝するかのどちらかなのでしょうが、私は本気でこの手法を追求しています。

夕方5時過ぎに仕事を終えた後、夕食までの1時間弱は運動の時間で、慢性化している頭痛・肩こりの軽減と気分のリフレッシュを兼ね、自宅前にある小学校でボールを蹴るのが日課です。4歳と6歳の息子と一緒に蹴ることもありますが、子供たちが気乗りしないときには1人で蹴ります。校門の脇に掲げられた看板によると、部外者の立ち入りは一応禁止されているようなのですが、下の写真に示すとおり、小学校側は「立ち入りを無断で禁じている」ので、何の躊躇もなく立ち入り、おもむろに準備運動を始めます。本稿執筆時点では長男もまだ入学前だというのに、小学校の先生方とはもうすっかり顔なじみで、学生時代にサッカーをやっていらしたという校長先生とも気軽にパス交換をする仲です。

不可解な看板

夕暮れ時、人気のない小学校で1人黙々とゴールに蹴り込む時間は、他人には理解し難いかもしれませんが、至福のひとときです。サッカーをやったことがない人には、日本代表の試合などで選手たちがいとも簡単にボールを蹴っているように見えるかもしれませんが、丸いボールを丸い足面で狙いどおりに蹴るのは、実は非常に難しい行為です。自分がイメージしたとおりの弾道、回転、強度、コースにボールが飛ぶのはせいぜい10発のうち1発くらいなのですが、ボールがイメージとおりの軌道を描いてゴールネットに「パサッ」と収まったときの爽快感は格別で、このカタルシスを得るために、私は翻訳時の数倍の集中力で目の前のボールと向き合います。

ただ蹴っているだけでは物足りなくなり、昨年20年ぶりにスパイクを購入。キックのフォームとボールの軌道を確認するためにカメラで撮影してみました。せっかく撮ったからということで、自社のウェブサイトに映像を公開したら、サッカー関連の仕事の引き合いが舞い込むようになりました。まだ受注に至ったケースはありませんが、受注の有無に関係なく、私には十分刺激的です。なぜなら、自らのフリーキックの動画を掲載した翻訳会社のウェブサイトなんて、「珍しくて」、「変わっていて」、「そんなの他になくて馬鹿みたい」だからです。

フリーキック動画
https://www.youtube.com/watch?v=3BzBBFj6_EU

さて、そんなリフレッシュの時間を終えて家族全員でのんびりと夕食を取った後、子供たちを風呂に入れたら、もう就寝の時間です。絵本を読んで子供を寝かしつけたら、私もすぐに寝てしまいます。あくまでも自己評価ですが、世間一般の標準から見て、私は「イクメン」としてほぼ合格点と言えそうです。週末だけでなく、先述のとおり平日も毎日子供たちと過ごしますし、ほぼ毎月行われる幼稚園行事もほぼ皆勤賞なのですが、我が家は「幼稚園から至近距離」、「父親が自営業」、さらには「在宅勤務」という、幼稚園による父母会会長就任打診条件を理想的な状態で兼ね備えており、このままでは会長ポストに一直線ということに気付きました。私は今、どうやって幼稚園行事からフェードアウトしていくかを考えているところです。

幼い子供というのは、特に男の子だと、こちらの思惑どおりに動かないケースが圧倒的多数です。そして大人の想像力を大きく上回る斬新ないたずらを仕掛けてくる一方で、「『手袋』を逆さまに読ませて6回叩く」という下らない遊びが異常にウケてしまい、大人なら1度で済むところを何度も繰り返す羽目に陥ったりします。

続きは WEB で
http://journal.jtf.jp/

Writer Profile

中村泰洋
Yasuhiro Nakamura

普通科高校卒業。宅配便ドライバー、塾講師、翻訳会社勤務、ローカリゼーション翻訳者を経て、2009年よりフリーの情報技術系特許翻訳者。学歴・職歴とも貧弱で、専門性も高くないことから、基準が曖昧で競争相手が多すぎる「上手い翻訳」ではなく、「漏れと揺れのない翻訳」を届けることにより、発注サイドから見て「計算できる翻訳者」であることが信条。とにかく人と違うことがやりたい性分で、試行したアイデアは数知れず。その大半は失敗に終わるも、「試したのは業界内で自分だけ」という思いだけで満足できる楽天家。翻訳で日本サッカー界に貢献することが1つの夢で、日本サッカー協会公認指導者ライセンスも保有。

人間翻訳者の仕事部屋

MISSION STATEMENT

フリーランス翻訳者になり13年目に入りました。10年後、20年後の翻訳者としてのキャリアを模索し、いろいろな方のお話を伺ってきました。向こう10年、20年、30年の翻訳者としてのキャリアプラン、ライフプランを立てる上で、業界で活躍されている翻訳者の方々のお仕事ぶりを拝見したい、と思い、このコーナーでは、2000字、翻訳、というお題に対して映し出される「人間翻訳者」の方々の「仕事部屋」を拝見したいと思います。皆さん方の「機械翻訳」に負けない「人間翻訳者」としてのキャリアの一助となれば幸いです。

Column 03 Owner

矢能千秋

Chiaki Yano

PROFILE

University of Redlands 卒。サイマル・アカデミー翻訳者養成コース本科（日英）修了。NPO えむ・えむ国際交流協会（代表：村松 増美）事務局を経て、現在フリーランス13年目、JAT 会員９年目。JAT ではアンソロジー委員会、SNS 管理委員会、ウェブサイト・コンテンツ委員会に所属。NES とペアを組み、スピーチ、ウェブコンテンツ、印刷物、鉄道、環境分野における日英翻訳に従事。2012年よりサン・フレアアカデミーにてオープンスクール講師も務める。

■ Twitter: @ChiakiYano
■ブログ：http://chiakiyano.blog.so-net.ne.jp/
■ http://jat.org/translators/4596

在米翻訳者のつぶやき

翻訳者

ラッセル秀子

ここカリフォルニア州モントレーは自然豊かな海沿いの町だ。海辺を歩けばラッコやアシカの姿が見えるし、庭先にはシカやアライグマ、リスなどがやってくる。アメリカ人に人気の観光地なので、夏は町中に観光客があふれる。

そんなのんきな土地にいても、インターネットのおかげで仕事の面では不自由しない。ほぼ問題なく必要な資料にアクセスできるし、日本時間の朝9時がこちらの夕方なので、日本時間に合わせた仕事にも問題なく対応できる。

私はずっと産業翻訳の仕事を主にやってきたが、最近は出版翻訳が多い。仕事を受けると、はじめに1日あたり何ページ翻訳するかノルマを決めて、それに従って進める。第一校はかなり粗い訳で、英語でそのまま残すところもあり、とても人には見せられない代物だ。第二校で原文と訳文を突き合わせ、調べものをできるだけすませる。第三校からは日本語で推敲あるのみ。だいたい第七校ぐらいまでしつこく推敲を重ね、できれば最後に原文ともう一度突き合わせる。最初からまともな文章を書ける才能があればこんなに推敲を重ねなくても済むのだろうが、残念ながら私は無理のようだ。

出版翻訳と産業翻訳には、報酬体系をはじめいろいろな相違点があるが、なんといっても大きな違いは作業期間の長さだろう。フルで稼働した場合、産業では長くても1～2か月ぐらいのものしか私は経験がないが、出版の場合、ふつう3～4か月はかかる。村上春樹の『走ることについて語るときに僕の語ること』（文藝春秋刊）に、小説家にとってもっとも重要な資質は才能の次に「集中力」と「持続力」だとあるが、これは出

健康管理が第一なので、ウォーキングを日課に。毎日通る海辺の散歩道から。

版翻訳にもそのままあてはまる。集中力と持続力は「才能の場合とは違ってトレーニングによって後天的に獲得し、その資質を向上させていくことができ」、ものを書くという作業は「一般的に考えられているよりも遙かに大量のエネルギーを長期にわたって必要とする」ような、まさに「骨身を削るような労働が、身体の中でダイナミックに展開されている」と同書で指摘されている点も、翻訳の経験がある人なら嫌というほど痛感するはずだ。本の翻訳に取りかかっているとき、私はいつも「鶴の恩返し」の物語を思い出す。いま現在持てる力をふりしぼり、ひたすら地道な作業を続ける過程は、鶴が自らの羽根を一本一本抜いて布を完成させるのにどこか似ている。私の場合、翻訳作業中の姿はあまりにも悲惨で人様の目にはさらせないという点も、悲しいかな、通じるものがある。

どう控えめに見ても出版翻訳はとにかく過酷な作業だ。それでもやめようと思わないのは心理的報酬が高いからだろう。まず、文章のプロが書いた良質の文章を訳せる喜びは何ものにも代え難い。また、本を一冊翻訳することは、学校で講義を受ける経験にも似て、知識が血となり肉となるのがわかる。調べ物や推敲を重ねる作業も最高の知的ゲームのようで楽しい。

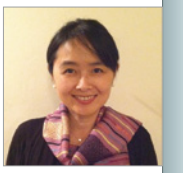
作業中は原書の世界にどっぷりはまりこんでしまうのも、出版翻訳の特徴かもしれない。私はもともとはまりやすい性格なのか、ツール・ド・フランスの本を訳したとき、それまでまったく知らなかった自転車競技に夢中になり、レースまで見に行った。食問題の本を訳したときは、アメリカの牛肉生産の実態を知って愕然とし、しばらく牛肉が食べられなくなった。戦時中アメリカで起きた日系人強制収容について訳していたときは、脳内が完全に戦時中にタイムスリップしてしまい、道行くアメリカ人がみな人種差別をしているように思えて参った。

さて、私のような海外在住の翻訳者がいちばん気をつけなければいけないのは、日本語環境に住んでいないということだ。英語は毎日いやでも耳に入ってくるので、新しい言葉や表現をできるだけメモするようにすれば、まあまあ身につく。けれども海外生活も長くなると、英語が身につくスピードより、母語である日本語が衰えるスピードの方がどうやら速いようだ。インターネットや雑誌、新聞で日々新しい情報に日本語で触れることはできるが、意識的に語感を維持して磨く努力をしないと、すぐにさびついてしまう。日本に帰国すると、耳をそばだて目を皿のようにして「生きた日本語」をめいっぱい消化吸収する。友人とのおしゃべり、見知らぬ人同士の会話、電車の中吊り広告、町の看板――生きた日本語に久しぶりに触れると、枯れかけた植物に水をやったときのように語感がどんどん生き返るのがわかる。

早いものでこちらに住んで18年になる。今後は、アメリカに住んでいるからこそ身につくある種の土地勘や、アメリカ社会の空気感への理解を深めながら、在米翻訳者ならではの仕事ができれば本望だ。人々の心に残り、長く読み継がれるような良書にめぐりあえるよう、ひとつひとつの本との出会いを大切にしていきたい。

ヨットハーバーには、こんな至近距離でラッコがいることも。

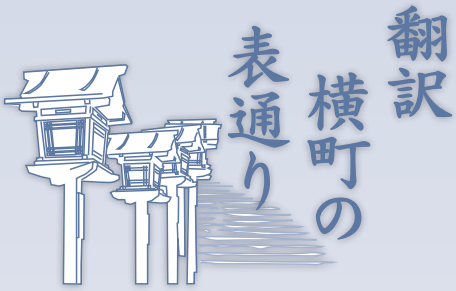
Writer Profile



ラッセル秀子
Hideko Russell

翻訳者。東京都目黒区出身。聖心女子大学卒、米国モントレー国際大学院修士課程修了。2005年から同大学院で教鞭をとる。訳書に、マイケル・ポーラン『雑食動物のジレンマ』（東洋経済新報社）、マイケル・ポーラン『フード・ルール』（東洋経済新報社）、デヴィッド・ナイワート『ストロベリー・デイズ――日系アメリカ人強制収容の記憶』（みすず書房）、デール・マハリッジ『繁栄からこぼれ落ちたもうひとつのアメリカ』（ダイヤモンド社）ほか。趣味は海を見ること、ネコと遊ぶこと、読書に旅行、茶道など。カリフォルニア州モントレー在住。

メール：hideruss@gmail.com
モントレー国際大学院（MIIS）プロフィールページ：
http://www.miis.edu/academics/faculty/hrussell



MISSION STATEMENT

「翻訳横丁の表通り」には色々な人々が往来するようになりました。

このコーナーでは、翻訳者さん達に「翻訳横丁の表通り」に出店して頂き、自身が持つ翻訳への「こだわり」を記事にして頂きます。「想い」であったり「ツール」であったり、「翻訳方法」であったり「将来の夢」であったり、何が飛び出るかは執筆者の翻訳への「こだわり」次第。ちょっと立ち寄って、覗いていきませんか？

Column 04 Owner

齊藤貴昭
Takaaki Saito

PROFILE

電子機器メーカーにて開発／製造から市場までの品質管理に長年従事。5 年間の米国赴任から帰国後、社内通訳・翻訳者を6 年間経験。2007 年から翻訳コーディネータ兼翻訳者として従事。「翻訳者 SNS コーディネータ」として業界活動に精を出す。ボタリングが趣味。甘いもの好き。Twitter や Blog「翻訳横丁の裏路地」にて翻訳に関する情報発信をしています。

■ Twitter：terrysaito
■ Blog：http://terrysaito.com

インハウス経験がくれたもの

実務翻訳者
石亀 豪

なぜ？－これが記事執筆のご依頼を受けたときの率直な気持ちでした。僕は出版翻訳の経験もなければ、トラドスも使いません。マクロもつくれませんし、博士号も持っていません。ネイチャーに投稿したこともありません。とはいえ、縁あって頂いたせっかくの機会。フリーランス→インハウス→フリーランスという翻訳経験を通じて得たこと、変わったことを自己紹介的に書かせて頂ければとおもいます。このコラムの趣旨である「こだわり」からずれてしまうかもしれませんが、若い方、特に実務翻訳を目指している方にとって考える材料になればうれしいです。

まとめ

- 30歳そこそこでフリーランスになった自分にとってインハウスは必要な経験でした。
- 自分の翻訳力を客観的に把握できました（脱お山の大将/「フィードバックがない≠問題がない」を実感）。
- 生産性をより意識するようになりました（インハウスは常にスピードが求められる）。
- 仕事にオンオフをつけるきっかけになりました（納期を守りさえすればいいフリーランス、ともすれば仕事がだらだらに）。
- フリーランスに戻った現在は仕事時間を40時間に制限（この時間内でどれだけ効率を上げられるか）
- 精神的バランスを崩して以来、趣味や仕事以外の目標を増やして心に保険をかけています。
- 同業者とのネットワーキングは最高の投資です。

翻訳業をはじめるまで

大学卒業後、幸運にも奨学金をいただき、オーストラリアで野生動物学を勉強することができました。その間、英語でのコミュニケーションに苦しめられ、それがトラウマになっていたので、まさか将来英語を仕事にするとは思ってもみませんでした。No. 267 に寄稿された小林晋也さんも似たようなことを書かれていて、おもわず頷いてしまいました。

帰国後は知人の紹介で札幌の環境団体にひろってもらい、「野生化アライグマの撲滅」という北海道のアンビシャスな夢に乗っかり、そこそこ充実した日々をおくっていました。また、住む場所を選ばない仕事としての翻訳にも興味があったので、通信教育を受けたり、スクールに通ったりもしていました。

そうこうしているうちに気付くと30歳。このまま環境系の仕事を続けるか、ひそかな目標であった再渡豪に向けて翻訳業へとかじを切るかの選択をせまられ（年齢が上がるほどビザの取得が難しくなるため）、心の声に従って後者を選びました。前職で特に実績のない段階での転職でしたので後々苦労することになりますが（お勧めしません）、欲しかったライフスタイルを手に入れることができ

たので後悔はしていません。絶えず仕事をいただけるようになるまでに2年ほどかかったとおもいます。

渡豪、心のバランスを崩す

2010年に念願のオーストラリア移住を果たしました。こんな根無し草でも取引先は見放さなかったようで、仕事は途絶えず、日本にいるときと変わらず朝から晩までPCに向かう毎日を送っていました。知り合いのいない土地で孤独を仕事で埋める日々がしばらく続きましたが、次第に気落ちする日が増え、最終的には息苦しさえ感じるようになりました。軽い鬱だったようです。

環境を変えるため インハウスへ

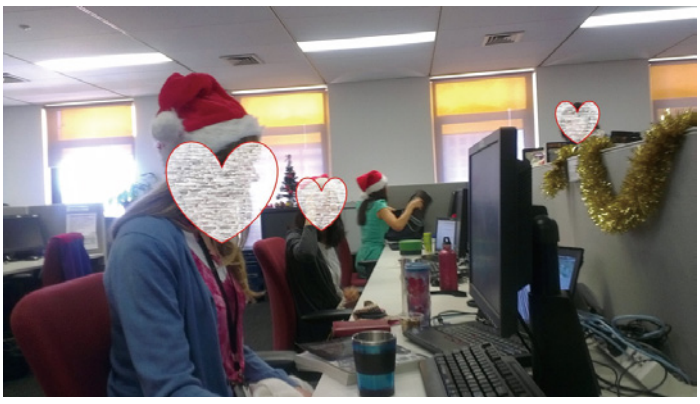
そんな時、同国の仕事募集サイトで大手IT企業が社内翻訳者を募集していることを知ります。これは何かのサインだ！とIT分野が苦手なんてことは忘れて飛びつきました。

その後の1年間、チームリーダーや同僚にも恵まれ、社内翻訳者としていい時間を過ごすことができました。収穫はとても書きつくせませんが、主なものは冒頭に書いた通りです。

またフリーランスへ

退社後、自営にもどったわけですが、率直に言って仕事量は減りました。1年たった今でも、一番忙しかった時期の60～70%くらいです。理由は2つあって、単価の特に低いエージェンシーからの仕事が減ったこと（替えの翻訳者はいくらでもいるのでしょう）、基準を決めてそれより条件の悪い仕事は受けないことにしたからです。仕事時間も週40時間までとして、その中でいかに効率を上げられるか考えています。このくらいの時間で稼げる額が自分の本来の稼ぎ力だとおもっていますし、この労働時間で自立して生きられる収入が得られないなら何かを根本的に変えないとだめだとおもいます。

最後に、ネットワーキングにも触れておかなければなりません。僕自身、同業の知り合いは少ないほうですが、これまで日本翻訳者協会（JAT）やオーストラリアの翻訳グループを通じて知り合った同業者には仕事内外で助けられてきました。まだ横のつながりのない方はセミナーやオフ会に参加することを強くお勧めします。きっと何かが動き始めますよ。（今年6月21～22日に東京で開催されるJATの年次国際会議IJETに出席します。そこで新しい出会いがあることを楽しみにしています。）



オフィスでの一コマ（機会があればまた…）

最後に

まとまりのない文をここまで読んで頂さってありがとうございました。そして声をかけて下さり、僕の個人的都合による担当号の変更にも快く応じて下さった齊藤貴昭さん、本当にありがとうございました。自分を振り返る良い機会になりました。

卵は100%自給です。

健康、自然、パートナーのRaniに日々感謝

Writer Profile

石亀 豪
Gou Ishigame

実務翻訳者。北海道出身。野生生物関係の仕事を経て2003年より翻訳業。農業、畜産、食品、環境分野を中心に。2010年よりオーストラリア在住。2012～2013年の1年間、IT企業で社内翻訳を経験。現在はフリーランスに戻り、ニューサウスウェールズ州バサーストのきれいな空の下で田舎暮らしを満喫中。腰痛に負けず、今年はトレイルマラソンに初挑戦。夢は自宅にビール醸造システムを導入すること。JAT、AUSIT会員。

WordSmyth Café

MISSION STATEMENT

WordSmyth Café は、翻訳に関わるさまざまの人々が集う「誌上カフェ」です。当コーナーでは、毎号異なる執筆者にご登場願い、翻訳を含む言語に関わるさまざまなテーマを取り上げます。名前の WordSmyth（ワードスミス）は、wordsmith（言葉の職人）と myth（神話＝お話）を組み合わせた造語です。「言葉の職人として、さまざまな物語を紡ぎたい」という店主の願いを表しています。

Column 05 Owner

遠田和子
Kazuko Enda

PROFILE

日英翻訳の傍ら翻訳学校での講師、またプレゼン研修の講師をしています。著書に、「英語なるほどライティング」、「Google 英文ライティング」、「e リーディング英語学習法」、「あいさつ・あいづち・あいきょうで3倍話せる英会話」（講談社）があります。趣味は読書・映画・旅行です。また英語スピーチの練習、バレエのレッスンを続けています。それぞれ少しでも上手くなるため、地道に努力しています。

＊ Website：WordSmyth 英語ラボ
http://www.wordsmyth.jp
＊ Facebook Page：WordSmyth
http://www.facebook.com/wordsmythlab
＊ e-reading ブログ：One Chapter Reading Club
http://minamimuki.com/fun-and-free

翻訳がつくる日本語

関東学院大学経済学部教授
中村桃子

ご好評をいただいております、『翻訳がつくる日本語―ヒロインは「女ことば」を話し続ける』（白澤社）の著者、中村桃子です。今日はこの場をお借りして、翻訳家でもない私が、どうしてこの本を書くことになったのか、お話ししたいと思います。

『翻訳がつくる日本語』では、日本語は翻訳から大きな影響を受けているのではないかという提案をさせていただきました。「翻訳が日本語に影響を与えている」という議論は、目新しいものではありません。「演説」という言葉や「～デアル」という言い回しは、明治時代に西洋の言葉を翻訳するために新しく作られたことが指摘されています。でも、翻訳が現代の日本語にも影響を与えているという声は、あまり聞いたことがありません。

私が最初に翻訳に興味を持ったのは、ファンタジー小説の大ベストセラー、ハリー・ポッター・シリーズを読んだときです。このシリーズに登場する女の子ハーマイオニー・グレンジャーの言葉づかいが、「まあ、～だわ、～かしら」のような、いわゆる「女ことば」に翻訳されていたのです。表1に、第1巻からいくつか例を挙げました。

第1巻のハーマイオニーの年齢は11歳。日本で言えば、小学五年生です。日本の小学五年生の女子で、こんな「女ことば」を話している子供などいないのに、と不思議に思ったのです。

それ以来、意識して身の回りの翻訳を見てみると、ハーマイオニーに限らず、映画や新聞インタビューなど多くのメディアで、外国人女性の台詞は、日本人よりもずっと典型的な女ことばに翻訳されていることに気がつきました。たとえば、映画『エイリアン』（1979）で、主人公のリプリーがエイリアンとの死闘の果てに、一人だけ生き残って発したせりふは、以下のように訳されています。

I got you, you son of a bitch.
やっつけた**わ**　化け物！助かった**のよ**。（日本語字幕：岡枝慎二）

実は、プロフィールを見ていただければ分かると思いますが、私は言語学分野の人間で、特に日本語の女ことばについて考えてきました。そこで学んだことは、二つあります。

ひとつは、「女ことば」は敬語と並んで日本語の特徴だと考えら

表1

Harry Potter and the Sorcerer's Stone J. K. Rowling 1997, Scholastic Press	**『ハリーポッターと賢者の石』** 松岡佑子訳1999、静山社
"Well, it's not very good, is it?..." (p.105)	「**まあ**、あんまりうまくいかなかった**わね**。…」(p.158)
"He was never going to meet you…" (p.159)	「はじめから来る気なんかなかった**んだわ**…」(p.233)
"We wondered who Dumbledore had trusted enough to help him,…" (p.232)	「ダンブルドアが信頼して助けを借りるのは誰**かしらね**。…」(p.339)

WordSmyth Café

れていて、昔からある日本語の伝統だと言われているということです。日本語には「女ことば」と「男ことば」の違いがあるので、小説を読んでいても、英語のようにhe said（と、彼は言った）、she said（と、彼女は言った）といちいち書いてなくても、言葉づかいだけで話しているのが女性か男性か分かると言われます。

もうひとつは、意外にも、日本人女性は女ことばなど使っていないということです。女性が実際に話している会話を分析した研究の中には、ハーマイオニーが上の例で使っていた「〜だわ」や「〜かしら」は「死語だ」と指摘しているものもあります。つまり、邦訳のハーマイオニーは、日本人でも使わないような女ことばを話しているのです。

これは、おもしろいと思いました。なぜならば、日本人女性は使っていないのに、日本語の特徴であり伝統だと考えられている「女ことば」を大事に使ってくれているのが、翻訳の中の女性たちだからです。「女ことば」という日本語の伝統を守っているのは、日本人の言葉づかいではなくて、翻訳の日本語なのです。

なぜこのようなことが起こるのか。翻訳は、女ことば以外にも、日本語にどのような影響を与えているのか。本書では、男ことばや方言など、いろいろな言葉づかいの例も取り上げて、翻訳が現代の日本語に与えている影響を見ています。翻訳研究では、文学作品が取り上げられることが多いのですが、本書では、テレビドラマや新聞インタビュー、広告や映画にも積極的に言及しています。

翻訳の問題は、「日本人」について考えるにあたっても、面白い現象です。外国人に、「日本人は、私が少し日本語を話しただけで、『日本語が上手ですね』と言う」とよく言われます。これは、裏を返せば、日本人しか日本語を話せないと思っているということです。ある意味、「日本語を話せる」ことが日本人の条件になっているのです。

この論法から言えば、日本語とは「日本人が話している言葉」ということになります。しかしハーマイオニーの例では、外国人女性の方が女らしい女ことばを話しています。日本人よりも、外国人による会話の翻訳のほうが、日本語らしい日本語の伝統をしっかり継承しているのです。

だとしたら、「日本語とは日本人が話している言葉だ」とは言えなくなってしまいます。何しろ、翻訳では日本人ではない人が日本語を話すのですから。では、日本語とは何なのか。翻訳について考えていくと、翻訳家が翻訳するときに使うさまざまな言葉の重要性に思い至ります。ところが、「翻訳は日本語に影響を与えている」という視点は、翻訳家の皆さんにも意外に受け取られたようです。この理由はいろいろ考えられるでしょうが、「翻訳」という仕事がなかなか表面に現れにくいことも一因だと思われます。

グローバル化が進んだ現代、翻訳大国と言われる日本に住む私たちは、気がつかないうちに日々夥しい数の翻訳に接しています。書き言葉では、文学作品やテレビのテロップから取扱説明書まで、話し言葉では、映画やドラマの吹き替えからインタビューまで。考えてみれば、私たちが接している日本語の多くが、翻訳なのではないでしょうか。

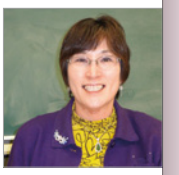
一方で、大量の翻訳が日常的に行われると、翻訳家の仕事はますます目に付きにくくなります。原作の作者が大々的に宣伝されることはあっても、翻訳家の仕事が注目されることはめったにありません。たまに注目されたとしても、誤訳が指摘される程度です。

その意味で本書には、翻訳家の仕事に気づいてもらいたいという私の願いも託しています。私自身、ほんの少しですが、専門書の翻訳を手がけたときに、翻訳という仕事の難しさを実感したからです。実際、本書を書くにあたって数多くの翻訳作品を読んだり聴いたりしましたが、翻訳家の創意工夫に脱帽することばかりでした。こんなにも大切に翻訳された日本語に、私たちはもっとたくさんの注意を向けるべきではないかと感じました。

もちろん、本書の中では、翻訳という作業がはらむ問題点もいくつか指摘しています。黒人の発言がしばしば東北弁に翻訳されてきたという事実もそのひとつです。原語が使われている社会の差別は、翻訳を通して、日本社会の差別と結びつくことがあるのです。

このような問題も含めて、「翻訳は面白い」ことが伝われば、著者としてうれしい限りです。プロの翻訳家の皆さんから見れば、まだまだ足りない点もたくさんあると思いますが、ぜひ手にとってご覧になってください。

Writer Profile



中村桃子
Momoko Nakamura

1955年東京生まれ。上智大学大学院修了。博士。関東学院大学経済学部教授。著書に、『翻訳がつくる日本語―ヒロインは女ことばを話し続ける』（白澤社）、『女ことばと日本語』（岩波新書）、『〈性〉と日本語―ことばがつくる女と男』（NHKブックス）、『「女ことば」はつくられる』（ひつじ書房、第27回山川菊栄賞受賞）、『婚姻改姓・夫婦同姓のおとし穴』『ことばとフェミニズム』『ことばとジェンダー』（以上、勁草書房）。共著に、*Japanese Language, Gender, and Ideology*（Oxford University Press）、*Femininity, Feminism and Gendered Discourse*（Cambridge Scholars Publishing）、*The Language and Sexuality Reader*（Routledge）他。編著に、『ジェンダーで学ぶ言語学』（世界思想社）、『連続講義　暴力とジェンダー』（白澤社）。訳書に、『ことばとセクシュアリティ』（三元社）、『フェミニズムと言語理論』（勁草書房）。

募集 **広告募集のおしらせ**

特集記事の掲載に合わせてメディカル翻訳に関する広告を募集しています。お気軽に JTF 事務局までお問い合わせください。

Next Issue

次号予告

翻訳の未来を考える JTF JOURNAL

July / August 2014 #272

2014年7月11日発行予定

※発行日や内容は変更になる可能性があります。

メディカル翻訳特集

2014年7月発行予定の次号（No.272）では、
アスカコーポレーション代表取締役の石岡映子さん（JTF 理事）を特集編集者にお迎えして
「メディカル翻訳」を特集する予定です。
ご期待ください。

Editor's note

翻訳における技術革新を共有する場として恒例となった TAUS Tokyo Executive Forum が今年も4月に開催されました。表紙で紹介した NTT ドコモの「翻訳メガネ」のほかにも、看板や印刷物を簡単に多言語化するソリューションを提供する「QR Translator」、分野を絞ることで比較的少量のコーパスでも翻訳作業の効率を改善できたという Hunnect 社など、興味深いプレゼンが多数登場し、収穫の多いイベントとなりました。

昨秋に機械翻訳の老舗企業である SYSTRAN を買収した韓国の機械翻訳ベンダー、CSLi からも副社長のキム・ドンピル氏が来日し、もともとアジア言語に対しては強みをもつ同社が SYSTRAN の買収により欧州言語のノウハウも手中にすることで、Google と棲み分けていけるビジョンを掲げていることに強い印象を受けました。

翻訳会社にとって、Google とどう棲み分けていくのかというテーマが遠くない将来に避けて通れない課題になると考えています。Google のビジョンと資本力と技術力をもってすれば、機械翻訳の性能の格段の向上と利用場面の拡大が実現できる可能性があります。しかし、機械がすべての翻訳を処理できない以上は人間の翻訳者が不要になることは当面ありませんし、人間の翻訳者の手になる言語資産を Google が必要とし、Google 自体が翻訳会社を経営するのでない限り、翻訳業界にはなんらかの新しい役割が産まれていくものと思います。そのような新しい翻訳業界の役割を上手に掴めるかどうかが、翻訳会社の未来を左右するのではないでしょうか。

編集長 **河野 弘毅**
Hiroki Kawano

一般社団法人 日本翻訳連盟 機関誌
日本翻訳ジャーナル
2014 年 5 月／6 月号 #271

発　行　2014 年 5 月 9 日
発行人　東 郁男（会長）
編集人　河野 弘毅
発行所　一般社団法人 日本翻訳連盟
〒 104-0031 東京都中央区京橋 3-9-2 宝国ビル 7F
TEL. 03-6228-6607　FAX. 03-6228-6604
E-mail. info@jtf.jp　URL. http://www.jtf.jp/
デザイン　中村ヒロユキ（Charlie's HOUSE）
WEB 版制作　ジャーナル編集委員会

無断転用禁止 Copyright©2014 Japan Translation Federation

翻訳・ローカリゼーション・
ドキュメンテーションサービス
TOIN
Communications for
a global marketplace

51年目のスタート。

十印は、ますます激しくなる時代の変化に迅速に対応すべく、
機械翻訳をはじめとした技術革新を目指します。
2014年、更なる進化を求めて、
新オフィスにて51年目をスタートさせました。

Our office has moved >>> 本社移転のお知らせ

営業開始日：2014年4月21日（月）

＜新住所＞ 〒141-0031 東京都品川区西五反田７丁目25番5号 オーク五反田ビル
TEL 03-5759-4353（代表） FAX 03-5759-4375

New Standards in Translation

募集中！

**営業、コーディネータ、
校正スタッフなど、多くの人材を
各拠点で募集しております！**

言　語	英語・中国語・ドイツ語・フランス語・スペイン語・イタリア語・ロシア語 韓国語 等（その他言語も募集中）
分　野	特許・工業・医薬・金融・ローカライゼーション
内　容	翻訳者・校正者・メディカルライター・通訳者・ワープロ外注 テープライター 等
応募方法	下記ウェブサイトからご応募下さい

株式会社 翻訳センター JASDAQ 証券コード:2483

大阪　大阪市中央区久太郎町4丁目1番3号 大阪御堂筋ビル13階
TEL:06-6282-5010 E-Mail:info@honyakuctr.co.jp

東京　東京都港区三田3丁目13番12号 三田MTビル8階
TEL:03-6369-9965 E-Mail:freelance@honyakuctr.co.jp

名古屋　名古屋市中村区名駅3丁目16番4号 太陽生命名駅ビル5階
TEL:052-571-2101 E-Mail:nagoya@honyakuctr.co.jp

募集要項・会社概要等、詳しくはウェブサイトをご覧下さい http://www.honyakuctr.com/

JTF JOURNAL #271 May / June 2014

ijet 25 Tokyo
The 25th International Japanese-English Translation Conference
June 21-22, 2014

第25回 英日・日英 翻訳国際会議 東京大会

Paving the Way Forward:
翻訳・通訳がはぐくむ未来

2014年 6月21日(土)～22日(日)
東京ビッグサイト

6/5(木) 申込み〆切

基調講演

村岡花子ー
『赤毛のアン』翻訳に託した
未来への希望

講演者：作家 村岡恵理さん

2008年、『赤毛のアン』の原作誕生100年の年に、著書『アンのゆりかご　村岡花子の生涯』を上梓。本著が、2014年前期のNHK連続テレビ小説「花子とアン」の原案となる。

来場者に抽選で超豪華プレゼント！

翻訳支援ツールや翻訳者・通訳者の必携ツールが当たる！

ネットワーキングの場

出会いの場！
「ネットワーキングディナー」と
「ネットワーキングランチ」

国内外から通訳者翻訳者が一同に会する
ネットワーキングに最高のチャンス！

メインセッション　70を超えるセッション、通訳翻訳のテーマパークです！

翻訳　各界の専門家が登壇する充実の翻訳セッション

分野別
医薬／特許／法律／金融／
IT ローカライズ／字幕／文芸

ライフスタイル
ストレス管理／資産管理／
肩こり解消法

ツール
Trados／OCR ソフト／
音声入力／ Word ／
秀丸マクロ／
その他

さらに！！
翻訳業界の将来像／チームで翻訳／
ウェブを使ったマーケティング法／
出版翻訳／英文ライティング／
英日翻訳ワークショップ

詳しくは Web サイトで！

通訳　業界の重鎮が登壇

英日 逐次通訳
『東京裁判における通訳』の武田珂代子先生（立教大）による、通訳史、通訳教授法の深い観点を踏まえた英日逐次通訳ワークショップ。

日英 逐次通訳
『英米リーダーの英語』の著者で会議通訳者の鶴田知佳子先生（東京外国語大）による日英逐次通訳の理論と実践の授業。

他にも４つのセッションをご提供！
医学英語学習法／インハウス通訳者の仕事／スポーツ通訳／
同時通訳者のノート術＆学習法

WEB サイトはこちら　IJET-25　検索

JAT 主催：日本翻訳者協会　　後援：外務省、国際交流基金

旗布価格 540円(税込)
一般社団法人 日本翻訳連盟 機関誌
日本翻訳ジャーナル
2014年5月9日発行